

学習に意欲的に取り組めない生徒からみた授業とその改善

—中学校社会科の授業実践から—

熊谷 大輝 教職基盤形成コース 教育課題プログラム

キーワード：学習意欲，安心感，学習者の声

1. 研究背景

学習指導要領「生きる力」（平成 29 年）では「生徒の（中略）学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすこと」（学習指導要領 p. 24）とされ，学習意欲の向上が重視されている。中央教育審議会（2016）は，「いまだ，諸外国と比べると低い状況にあるなど学習意欲面で課題がある」（p. 140）とされており，学習の意欲が問題視されている。子どもの学習意欲に関する先行研究では，学習への動機づけに関する研究が多くされているが，嶋田（1992）は，「総合的学校ストレスが高い児童は，学年を問わず学習意欲が低い傾向にあることがわかる」（p. 14）としている。総合的学校ストレスには対人関係や学校システムが挙げられており，問題は多岐にわたることが明らかになっている。教育実習や授業観察でみられた生徒の中には，教師が提示した教材に対して興味を示す生徒がいる一方で，発問や教師の問いかけに反応を示さず授業で何をやるべきなのかわかっていない生徒の姿がみられた。

そこで本研究では，生徒が学習に向き合えない理由や学習意欲の阻害要因について，いわゆる教師目線（主導）で解決を目指すのではなく，学習者目線で考え，授業観察を通じて生徒の悩みの背景に迫り，授業に反映していく必要があるのではないかと考えた。

2. 研究目的

本研究の目的は，学習に意欲的に取り組めない生徒からみた授業の実態を描出し，そのような生徒がどのようなサポートを求めているのかを当事者視点から明らかにし，授業改善に活かす示唆を得ることである。

3. 研究方法

本研究では，中学校 2 年生の生徒 30 名を対象として，(1) 参与観察と (2) アンケート調査（事前事後）を実施し，あわせて (3) 抽出生徒 3 名に対する聞き取り調査を行った。

学習意欲の定義として，本研究では栃木県総合教育センター（2011）の「学ぶ意欲」である，「学習者が意志をもって，自発的に学習活動を求めようとする心の動き」（p. 1）を援用する。同センターのアンケート調査を行い，教室内での学ぶ意欲の数値が低く出ている生徒を聞き取り調査の生徒に選定した。

その後、抽出生徒に聞き取り調査を行い、当該生徒がどのような環境、サポートがあれば、学習の意欲が上がると考えているのかを明らかにした。対象生徒からの聞き取り調査の結果から、授業実践、アンケート調査を再度行い、授業の改善と生徒側からみた新たな授業を検討した。

4. 結果

参与観察、アンケート調査、聞き取り調査、授業実践から以下のことが明らかになった。

4.1 参与観察から

参与観察では、教師の手立てや材との関わりで意欲を見せる生徒がいる一方で、その影響が見られない生徒も観察された。生徒の中には意欲はあるものの、教室に居づらい生徒や、家庭に居づらい生徒もいた。また、他の生徒との関係の悪化で教室にいること自体に困難さを感じていて、授業に参加したくない生徒、授業に意欲的に参加できていない生徒の姿がみられた。

4.2 聞き取り調査から

聞き取り調査では、A 生、B 生、C 生の考えとして、以下の回答が共通に挙げられた。第一に、「安心感」というキーワードが浮き上がってきた。聞き取り調査をした生徒の中には、好きな教科を尋ねた時に、特定の教師の名前を答える者がいた。また、調査をしていく中で、教科の内容、授業の教材の改善以外の問題があることがわかった。実際、日々生活している教室の雰囲気や、生徒同士の友人関係が成立していない教室の雰囲気では、生徒が学ぶ姿勢を作る以前に、抽出生徒たちは、教室で安心して学べていない実態が明らかになった。

第二に、上記に関わって、教室での「他の生徒との関係」が浮き上がってきた。生徒が思考を深める場面では、「一人って難しい、周りの人と考えたい」(A 生)と他者と考えを深めたい思いはあるが、今回の事例では、教室での関係性が出来上がっていないため、学習に向き合う環境になっていないと考えられる。しかし、B 生は、「一人で考えるのは難しいが、友達と考えたい」と発言しており、友人と一緒に考えたいという思いはあった。その際、周りの人、隣の席、班での活動などは、教室の周囲の人との関係によって、A 生の「無理無理、今の席は無理」といった言葉のように、教室での関係ができていれば学びに繋がるはずの活動が、人間関係が原因で学びに繋がっていないことが明らかになった。

4.3 授業実践から

聞き取り調査の結果をもとに、社会科の地理的分野の授業実践を行った。これまでの筆者の授業では、教師が出した発問について考える場面では、個人で考える時間を設け、周りの人と考える時間を作っていた。今回の授業では、個人で考える時間の後、個人で考え続けたい人は個人で、同級生と考えたい人は、席を移動し任意の席や場所で思考する時間を設けた。生徒への聞き取り調査から、今回の授業実践の結果、参与観察、今回の授業実践までは観られなかった今まで一人で考えることができず諦めてしまっていた生徒が自ら

他の生徒のもとへ行き、教室内での会話や友人とのコミュニケーションによって学びを追求していく姿がみられた。

4.4 アンケート調査から

アンケート調査の結果では、聞き取り調査であがった「安心感」のキーワードから、アンケートの観点である「安心して学べる環境」の項目に着目した。No.1「授業でわからないことがあると、先生に聞くことができる」No.12「先生は学習のことについてほめてくれる」No.18「学校では落ち着いて授業を受けている」No.27「クラスは発言しやすい雰囲気である」の4つの質問を、4段階の解答「当てはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」で、平均値をとった。B生は2.50から2.50で変わらなかった。A生は2.25に対し2.75に上がった。C生は一回目が2.00に対し、2.50と上がった。

学級全体では、「安心して学べる環境」の項目について、授業前の平均値が2.63に対し、3回目（授業後）の調査では2.97に上がった。対象生徒からの聞き取り調査から、改善した授業を行った結果、教室全体でも「安心して学べる環境」の数値が上昇したことがわかった。

5. 考察

以上のことから、3点について考察した。第一に、学習者の声を聞いて授業を行うと、学習意欲のない生徒だけではなく、学級全体でも学習意欲が上がるのがわかった。

第二に、参与観察、聞き取り調査から、学習意欲のない生徒は、教材や学習の内容よりも、生徒同士の関係や環境が大きな要因になっていることが明らかになった。生徒から好きな教科を尋ねた場面では、生徒は好きな教科ではなく教師の名前を答えたこと、授業を受ける環境の観点から「安心感」というキーワードが出てきた。

第三に、学習場面での安心感を作る一つの手立てとして、個人で考える場面では物理的に寄り添うことや、任意の席で考えたり、考えを共有したりすることが有効であることが示唆された。これまでは、授業者の視点から、隣の人やグループでの活動を行なっていることが多かったが、より安心して学べる環境を作るという観点から、グループや他者と考える場面で、「誰でも好きな人と好きな席で考えよう」という声かけをした。生徒の声から様々な工夫ができると考えるが、そこで重要視されるのは、学習効率を上げることだけではなく、子どもたちが安心して学習をするという意味で今回の声かけや好きな位置での学習への参加が必要なのではないかと考える。アンケート調査の結果でも、「安心して学べる環境」に着目したが、櫻井（2012）によると、『安心して学べる環境』とは、子どもが安心して学べる学校環境や家庭環境のことである。この環境には、安全に学べる物理的環境と安心して学べる対人的環境が含まれる。（中略）重要なのは後者で、子どもにとって自分をサポートしてくれる友達や教師や親などがそばにいる環境である」（p. 61）とされている。今回の授業場面でも、生徒が考える場面でサポートしてくれる友達との場面を作ることができたことが、生徒の事後のアンケート調査や生徒の姿に現れたと考えられる。

また、今回の授業実践では、授業内容を伝えた上で、通常学級の授業に出られていない生徒（D 生）に授業への参加を促した。「今日みたいな授業ならまた、出たい」と述べた。この生徒は、他者との関係ができていない中で、授業内での他者との話し合いが授業に出ることの阻害要因の一つとなっていた。しかし、今回の授業では、考える場面で自ら仲のいい同級生の席へと行き考えを深めている姿が見られた。今回の授業実践では、D 生の様な姿から、生徒の学習意欲を阻害している部分が、教室の中の生徒の困難に感じている部分と重なっていることが明らかになった。

6. おわりに

本実践から、学習に意欲的になれない生徒の視点に立ち授業作りをしていく重要性が示された。教師が生徒の学習意欲を上げ、生徒の授業や教室での学びを充実したものにするには、教師からの一方的な生徒へのアプローチだけではなく、生徒の学びを阻害している部分を見つけ出し、授業作りをしていくことが大切であると考え。そのためには、教室内での「安心感」を作る意味で生徒の声を聞き反映した、授業方法を取り入れる余地もあるのではないかと考える。本実践では、生徒から見た教室や安心感・教室での横のつながりが薄い生徒がいるクラスでは改善が見られた。他の教室で行う場合は、学習者の声を聞きながら、教師がクラスの中の生徒の状況と教師の介入の度合いを考えながら進めていくことが必要である。

本実践では、授業内での解決を目指したが、生徒の学ぶ意欲を引き出せるように、生徒の現状や課題の把握、日頃からの授業以外の部分でも、生徒との関係性を深めていく姿勢を持ち続け生徒と向き合っていきたい。

文 献

中学校学習指導要領（平成 29 年度）

櫻井茂男（2012）「学習意欲の形成」日本教材文化研究財団『研究紀要』第 41 号，pp61-64

嶋田 洋徳（1992）児童の心理的ストレスと学習意欲との関連，健康心理学研究，5 巻，1 号，pp7-19

中等教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）

栃木県総合教育センター（2011）「学ぶ意欲をはぐくむには」

栃木県総合教育センター「学習に関するアンケート」学ぶ意欲を測るアンケート改訂版（2011）

櫻井茂男（2012）「学習意欲の形成」日本教材文化研究財団『研究紀要』第 41 号，pp61-64